

参照点構造による数量詞の多義性の説明

中栄欽一

nakaemar@ybb.ne.jp

キーワード： 作用域、参照点構造、際立ち、コンテキスト等、節の中のトピック、限定、不定

要旨

Someone loves everyone.のように複数の数量詞を含む文は多義性が生じる。この多義性は作用域の作用によるもので生成文法では一般に quantifier raising (QR) および c 統御により説明される。構造上、相手の数量詞を c 統御する位置にある数量詞は広い作用域を取ることができるから、数量詞を含む名詞句を LF (論理形式) において非顕在的に移動させることにより作用域に優劣を生じさせ、多義性を説明するものである。someone が everyone を c 統御する位置へ移動すれば someone > everyone の解釈になり、逆であれば everyone > someone の解釈が得られる。この多義性は参照点構造を使って説明することができる。someone が参照点となって命題 (ターゲット) を解釈すれば前者の解釈が得られ、everyone が参照点となると後者の解釈が得られる。数量詞の多義性をこの参照点構造で説明するためには、参照点を決定する際立ちとは何か、またどのように参照点が決定されるかが問題となる。これらの点に関し、2章および3章でスコープのヒエラルキーに基づいて多義性の判定方法を論じた久野・高見 (Kuno, Susumu and Takami, Ken-ichi 2002 *Quantifier Scope*) のエキスパート・システムをベースに検討し、この検討結果に基づき4章で参照点構造による数量詞の多義性解釈のメカニズムを提案する。また van Hoek (1995, 1997, 2007) は代名詞の照応関係を参照点構造により説明しているが、この場合の参照点となるための条件は数量詞の多義性の場合と比べ異なる点がある。5章でこの違いを比較検討してその理由を明らかにする。

1. はじめに

複数の数量詞を含む次のような例文は多義性が生じる。¹

(1) Someone loves everyone.

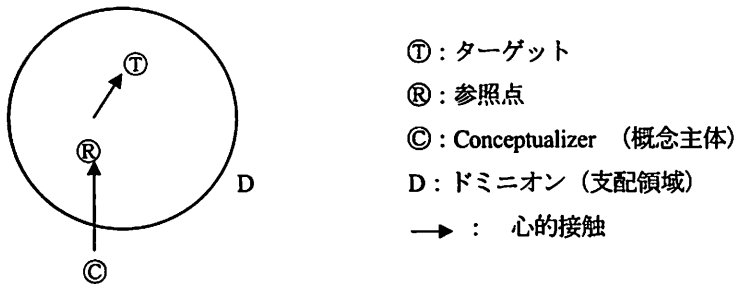
「どの人も (皆を) 愛している人がいる」 (someone > everyone)

「どの人にとっても誰かがその人を愛している」 (everyone > someone)

この多義性はスコープ(作用域)の作用によるもので生成文法においては一般に quantifier raising (QR) および c 統御により説明される。QR は May (1977) の用語で数量詞を含む名詞句を LF (論理形式) において非顕在的に移動させることにより数量詞のスコープに優劣を生じさせ多

¹ 数量詞とは数や量を表す表現で、some, any, aなどを指す。また WH 句も数量詞上昇と似た WH-raising の摘用を受けるので数量詞に含める。

義性を説明するものである。2つの数量詞が含まれる文で相手の数量詞をc 統御する位置にある数量詞は広いスコープをとることができるから、QRによって someone が everyone をc 統御する位置へ移動すれば前者の解釈（以降「表面解釈」と呼ぶ）になり、逆であれば後者の解釈（以降「反転解釈」と呼ぶ）が得られる。この多義性は参照点構造を使って説明することができる。someone が参照点 (reference point) になって命題（ターゲット）を解釈すれば表面解釈が生じ、everyone を参照点とすれば反転解釈となる。参照点は Langacker (1991, 1993) の用語である。認知的にあまり際立ち (prominence) が低い事物を探すときに、人はまずそれよりも際立ちが高い事物にアクセスし、それを手がかりにして目当ての事物にたどり着くことができる。参照点とは、このような人間の基本的な認知能力における「際立ちの高い手がかり」を指して言う。Langacker は、直接見つけにくい北極星は、まず際立ちが高く見つけやすい北斗七星を見つければ、それを手がかりに北極星にたどり着くことができるという例を示している。この手がかりが「参照点」、目当ての事物が「ターゲット」、参照点によってアクセスすることができる概念的領域が「ドミニオン (支配領域)」と呼ばれる。



(図 1)

この能力の言語面への適用例として Langacker は所有構文を挙げている。the cat's fleas という句ではターゲットのしらみにたどり着くためにその居場所である猫が参照点となっている。また van Hoek (1997) は生成文法では束縛原理により説明される代名詞の照応関係を参照点構造によって説明している。このように参照点能力は多くの言語使用面に現れる重要な認知能力である。本論文の目的はこの参照点能力を用いて、数量詞が複数含まれ多義性が生じる文の解釈のメカニズムを説明するものである。2章および3章で、スコープのヒエラルキーに基づいて多義性の判定方法を論じた Kuno and Takami (2002) のエキスパート・システムを参考に際立ちとは何か、さらにどのようにして参照点が決定されるかを検討し、この検討結果に基づき4章で参照点構造による数量詞の多義性解釈のメカニズムを提案する。また van Hoek (1995, 1997, 2007) は代名詞の照応関係を参照点構造により説明しているが、この場合の参照点となるための条件は数量詞の多義性の場合と比べ異なる点がある。この違いを5章で比較検討してその理由を明らかにする。

2. 際立ちとは何か、際立ちとスコープの関係

ある数量詞が他の数量詞より際立ちが高いとは具体的にどのような状態を指し、またスコープとどのように関わるのであろうか。この点に関しては Kuno and Takami (2002) の数量詞のスコープに関する主張が示唆に富んでいるので、まずこれを検討したい。Kuno and Takami (2002) は数量詞のスコープの解釈は統語、特異性、意味、談話・語用論的な種々な要素の相互作用で決定されると主張している。中でも次の9つのファクターが最重要だとしている。

- (a) Subject Q > Object Q > Oblique Q, Q = Quantifier: 主語の数量詞は目的語の数量詞よりも広いスコープをとる。目的語の数量詞は斜格の数量詞よりも広いスコープをとる。
- (b) Lefthand Q > Righthand Q: 左側の数量詞は右側の数量詞よりも広いスコープをとる。
- (c) Human Q > Nonhuman Q: 人間を表す数量詞は非人間を表す数量詞よりも広いスコープをとる。
- (d) Speaker/Hearer Q > Third-Person Q: 話者・聴者を表す数量詞は第三者を表す数量詞よりも広いスコープをとる。
- (e) More D (iscourse)-linked Q > Less D-linked Q: 話題に関係している数量詞は話題と関係が少ないものを指す数量詞より広いスコープをとる。
- (f) More Active Participant Q > Less Active Participant Q: 活動的な対象を表す数量詞は活動的でない対象を表す数量詞よりも広いスコープをとる。
N.B. この原則は主語以外の名詞に適用される。
- (g) More Specific Q > Less Specific Q: 特定な対象を表す数量詞は不特定な対象を表す数量詞よりも広いスコープをとる。
- (h) Each > Other Quantified Expressions: Each は他の数量詞よりも広いスコープをとる。
Each > some (+Nsg)/someone (sg)/Numeral > every > all > most > many > several > some (+Npl)/someone (pl) > a few
- (i) Topicalized Q > Nontopicalized Q: 統語的にトピック化した数量詞は統語的にトピック化していない数量詞よりも必ず広いスコープを取る。

Kuno and Takami (2002) の9原理に基づくスコープの Quantifier hierarchy は個々の事例の積み上げから経験的に導き出されたものである。(Kuno 1991)

例えば、Lefthand Q > Righthand Q であれば次のようになる。

(2) a. I introduced everyone to some guests.

b. I introduced some guests to everyone.

2つの文とも多義性があるが(2a)では every > some の解釈(皆をそれぞれ、何人かの客に紹介した)の方が some > every の解釈(何人かのお目当ての客がいて、その客にみんなを紹介した)より強い。一方(2b)は some > every の解釈のほうが every > some の解釈より強い。このことから Lefthand Q の方が Righthand Q より広いスコープを取るという結論が得られる。同じようにして他のファクターのスコープの優劣も決定される。ここで注目すべきは、各ファクターにおけるスコープのヒエラルキーは次に示すように際立ち度のヒエラルキーとみなすことができる

ことである。

(a) Subject Q > Object Q > Oblique Q については Langacker (1991: 323) の主張する文法関係における際立ち度の差に他ならない。すなわち、文法関係の中で最も際立ちが高い参与者（トラジェクター）は主語であり、次に際立ちが高い参与者（ランドマーク）が目的語である。目的語と斜格の間にも同様のトラジェクターとランドマークの関係が成り立ち、目的語の方が斜格よりも際立ちが高い。(b) から (g) についてもいずれも際立ち度の差と捉えることができる。²

(b) Lefthand Q > Righthand Q について: 他に差がなければ、文中で先に現れるものの方が後から現れるものより、一般的に際立ちが高いと言えるだろう。

(c) Human Q > Nonhuman Q ならびに (d) Speaker/Hearer Q > Third-Person Q については次のような empathy hierarchy (共感度階層—自分から見て共感を持つ対象の順番) に基づいている。

Speaker > hearer > human > animal > physical object > abstract entity (Langacker 1991: 307)

共感度が高いと言うことは際立ち度が高いということに他ならない。

(e) More D (iscourse) -linked Q > Less D-linked Q, (f) More Active Participant Q > Less Active Participant Q, および (g) More Specific Q > Less Specific Q についても明らかに際立ち度の差である。

(h) Each > Other Quantified Expressions については“each”の持つ語彙の特殊性に負うところが大きく、詳しくは3章の(C) eachの特殊性で述べるが、これも際立ちの差と捉えることができる。

(i) Topicalized Q > Nontopicalized Q はトピックとなった数量詞は他方の数量詞より当然際立ちが高い。しかも反転解釈を許さない絶対的な強さと言える。以上のように、9つのファクターにおけるスコープのヒエラルキーは、数量詞の際立ちの差を示す具体例と見なすことができる。したがってこのデータは際立ちの差とは何かを具体的に示すとともに、際立ちが高い数量詞は低い数量詞より広いスコープを取ることを示している。またこのデータは、参照点構造においては際立ちが高い方の数量詞が参照点となることから、参照点となる数量詞が他方より広いスコープを取ることを示唆している。

3. 数量詞の多義性—Kuno and Takami (2002) の主張

次に複数の数量詞が含まれる文において、相手より広い作用域をとる数量詞がどのように決定されるのだろうか。Kuno and Takami (2002) は Quantifier Scope Expert System (QSES) と呼ぶ計算式にもとづき、以下のような多義性の判定を行う。9ファクターの各項目はそれぞれ one vote を持っている。主語や目的語などに現れる数量詞が (a) から (i) までの項目にいくつ該当するかを調べて獲得票数を集計する。総獲得票が多い数量詞の方が相手より広いスコープを得る。

² トラジェクター、ランドマークは Langacker の用語である。ある認知された領域内の構造は、その際立ちの違いによって、背景的要素として機能するベースと、焦点化され際立ちの大きいプロファイルと呼ばれる部分とに分かれる。トラジェクターはプロファイルされた事物のうち、最も際立ちが高い部分を指し、ランドマークはその次に際立ちが高い部分を指す。

票差が少なければ、どちらの数量詞でも広いスコープをとることが可能なので多義性が生じると判定する。逆に票差が大きければ、獲得票が少ない数量詞は広いスコープをとることができず、多義性は生じない。これを具体例で示す。

(3) Every student admires some professor. [ambiguous] (Kuno and Takami 2002 Chapter 2 (68b))

Every student: 3 votes (Baseline, Subject Q, Lefthand Q)

some professor: 2votes (Baseline, some (+Nsg) > very)

Composite Expert: Ambiguous (every-wide : some-wide = 3 : 2)

(4) Each student admires some professor. [unambiguous] (Kuno and Takami 2002 (68a))

Each student: 4 votes (Baseline, Subject Q, Lefthand Q, Each > some (+Nsg))

some professor: 1 vote (Baseline)

Composite Expert: Unambiguous (each > some)

この結果 (3) は得票数が接近しているので、どちらの数量詞も相手より広いスコープをとれる。このため多義性が生じる。また (4) ではその差が大きいため each student が広いスコープをとる解釈しか存在しないとの結論が得られる。Kuno and Takami (2002) の多義性の判別方法は数量詞のスコープのヒエラルキーに注目して、これを QSES にもとづく得票 (得点) により計数化して判定する点に特徴がある。ただし例外として次の 2 点を挙げている。例外 1 : QSES (i) の Topicalized Q は他の QSES 項目に対し VETO を持っている。すなわちトピックとなった数量詞は他の項目に打ち勝ち、必ず広い作用域を持つ。例外 2 : 得られた解釈がプラクティカルに見てあり得ないものであればその解釈は消える。

(5) An oak grew from every acorn. (Kuno and Takami 2002 (82))

この例文は QSES の得票数によれば、an oak が 4 votes (Baseline, Subject Q, Lefthand Q, an > every) に対し every acorn は 1 vote (Baseline) ではあるが an > every の解釈はない。全てのどんぐりが一本の樫の木に育つことは現実問題としてあり得ないからである。このようにある解釈が生まれても、それが現実社会にありえない話であれば、その解釈は生じないということになる。Kuno and Takami (2002) は「どちらの数量詞が広いスコープをとるか」(本論文のテーマに即して言えば、「どちらの数量詞が参照点となるか」という点について、このように 9 ファクターの得票数を単純に合計したエキスパート・システムを使用しているが、この主張には疑問がある。最大の問題点は、QSES はすべての項目に一票を与えているが各項目は影響力が違うという点である。次にこの項目間の影響力の差について検討したい。

(A) Subject の特殊性 (subject は単なる一票ではない)

Subject は多くの場合、話者・聴者の意識の中心であり、旧情報である。すなわち始めからトピックとしての地位をもっていて際立ちが高い。QSES で見ても、次のように Subject は他のポイントと重なることが多い。

(i) Subject は通常同時に Lefthand Q である

(ii) Subject は Human Q であることが多い

(iii) Human Q は More Active Q である

(iv) Human Q は Speaker/Hearer となることがある

多義性がある文では、解釈の強さは同等ではない。例えば (1) の例では someone > everyone の解釈が everyone > someone より強いが、このような際立ちの優劣は QSES の計算をしなければ決められないのであろうか。この点に関して Kuno and Takami (2002) の計算は興味深いデータを示している。それはほとんどの例文で、得票数の計算をすると主語となる数量詞が目的語となる数量詞と比べて同等か、より広い作用域をとっている事実である。点差は様々であるが、どちらの数量詞の方が際立ちが高いかと言う点だけに的をしぼるとほぼ一貫した結果が得られる。³ また得票数の差が大きく unambiguous と判定している例文でも、すべて主語の数量詞が広いスコープを取っている。以上の事実はトラジェクターである主語がランドマークである目的語より際立ち高いということを裏付けている。したがって QSES は、際立ち度に優劣があることを示すデータであると同時に、主語の数量詞は目的語の数量詞より基本的に際立ちが高いという事実を裏付けるデータでもある。主語や目的語自体の際立ちの差 (QSES (a) Subject Q > Object Q) のほかに、際立ちに差をつける数多くの要素を拾い上げ、それを得票数で集計して比較しても、最終的には Langacker の言うトラジェクターとランドマークの際立ちの差やよく知られた grammatical relations hierarchy である Subject > Direct Object > Oblique (Keenan & Comrie 1997 他) に一致するという事実は大変興味深い。

(B) QSES の (e) More D linked Q の特殊性 (単なる 1 票ではない)

あるコンテキストを想定し、その中の談話を受けて発話されたと考えると得票数どおりの結論にはならないケースがある。

(6) Many of us/you hate some professors. (Kuno and Takami 2002 (65b))

Unambiguous (many > some)

QSES の判定をみると

Many of us/you: 6 votes (Baseline, Subject Q, Lefthand Q, Speaker/hearer Q, More D-linked Q, Many > some (+Npl))

some professors: 1 vote (Baseline)

Composite Expert: Unambiguous (many > some)

となり、some > many の解釈がないとしている。しかしコンテキストを世間一般の話としてではなく、自分たちの学校の中と狭い範囲に限定して、話題にしていた評判の悪い some professors に注目したと仮定すると (上の判定表の More D-linked Q が some professors のサイドに移動し得票数は縮小するが、まだ 5 対 2 である)、some professors が広いスコープを持つ「我々生徒の多くはある (特定の) 教授達を嫌っている」という解釈も十分成り立つ。筆者の 2 名のインフォ

³ 例外は主語が無生物で際立ちが低く、目的語に each が使われている (a) のようなケースと (b) のようなトピック化である。

(a) What is worrying each of you? (Kuno and Takami 2002 (63e) [ambiguous] what-wide : each-wide = 3 : 5)

(b) Many of these books, all of us have read with great enthusiasm. [unambiguous] (Kuno and Takami 2002 (85b) many > all)

(b) には all > many の解釈がない。

ーマントに聞いたところ2名ともこの文は多義性があるとの回答があった（どちらの解釈が強いかという点では意見が分かれた）。このようにコンテキストを与えてみると、必ずしも Kuno and Takami (2002) の主張する点数表どおりにはならないと考えられる。さらに例をあげる。

(7) Who did John introduce to everyone? (Kuno and Takami 2002 (64g))

Who: 3 votes (Baseline, Object Q, Lefthand Q)

everyone: 1 vote (Baseline)

Composite Expert: Unambiguous (who > everyone)

この計算から、(7) は unambiguous と結論付けている。特段のコンテキストがない場合はこの主張を受け入れられるが、(7) もコンテキストがあれば、例えば John が世話好きな（仲人好きな）人で、何人も交際相手を若い人達に紹介しているとすると、当然それぞれの人に別の人を紹介するだろうから、「ジョンはそれぞれ皆に誰を紹介しましたか？」と言う解釈も得られる。この点についてのインフォーマントの解答は、1名は John が matchmaker のようなコンテキストがあれば everyone > who もありうるとの回答で、1名は everyone > who の解釈は判断しづらい (mixed judgment between unacceptable and fully acceptable)、つまりこの解釈がまったく生じないということではないとの回答であった。このようにコンテキストが前提となっている場合には QSES の得票に大きな差があっても単純にその結論どおりにはならないと言える。

(C) each の特殊性 (each は単なる1票ではない)

(8) Who is bullying each dog? (著者の作例)

この例文における作用域を QSES により計算すると

Who: 4 votes (Baseline, Subject Q, Lefthand Q, Human Q)

each dog: 2 votes (Baseline, each)

Composite Expert: Ambiguous (who-wide : each-wide = 4 : 2)

となり who を参照点とする解釈の方が2倍も強いという判定になるが、著者のインフォーマント2名の判断では、1名は each > who の解釈すなわち For each dog, there are different persons who are bullying them. Who are they? との解釈の方が強いとの回答であった。これは each dog の得票数が少なくても each の持つ「個々、順次性」が強く影響して単なる1票以上の働きをしているからではなかろうか。each が使われることにより、それぞれの犬について尋ねているというフレームができあがる。その結果「それぞれの犬について、誰がいじめているのか」という解釈が生じるためと考えられる。以上のように、数量詞間の際立ちの差を決定する要因は、Kuno and Takami (2002) が主張するように QSES の9ファクターの単純集計ではないと言える。主語の数量詞は圧倒的に際立ちが高く、常に参照点となりうるが、目的語の数量詞でも More D linked Q や each が使われると、しばしば Subject Q より広い作用域を取れる事例を見た。次章ではこの問題点に基づき代案を提案する。

4. 参照点構造による説明

1章で参照点能力として説明したように、人間は際立ちがあまり高くない事物（ターゲット）

に直接アクセスすることが困難な場合に、まず際立ちが高い事物（参照点）にアクセスし、それを手がかりにして目当てのアクセスしにくい事物にたどり着くという認知能力を持っている。例えば、この能力が言語面で機能している例として次のようなトピック構文をあげることができる。These books, we have read with great enthusiasm. この文ではトピックである these books が参照点となり、話題はこれらの本に関するものであることを示し、文の命題（ターゲット）はその知識領域の中で解釈される。このように参照点を手がかりにすることにより命題が適切に解釈される。この認知能力は数量詞の多義性の解釈に応用することができる。数量詞が複数含まれていて多義性が生じる文を解釈する際に、際立ちが最も高い数量詞を参照点に選び、そのドミニオン（参照点に関する知識領域）の範囲の中で文の命題を解釈することにより適切な解釈が得られる。次の文を例にこの関係を見てみよう。

(9) Four boys dated three girls in a week. (Kuno and Takami 2002 (80))

まず主語の数量詞 four boys が参照点となるケース（表面解釈）を検討する。主語はトラジェクターとして節の中で最も際立ちが高い文法関係参与者であるため（Kuno and Takami 2002 では QSES (a) Subject Q > Object Q）、他に特別な要因がない限りデフォルトで参照点となる。主語 four boys が参照点として機能すると、これを手がかりとしてアクセス可能なドミニオン（主語 four boys に関する知識領域）が想定され、その領域内で節の命題（ターゲット）が解釈される。節の命題が参照点 four boys のドミニオンの中で解釈されるということは、話題は four boys に関することを意味し、後続の動詞句 dated three girls in a week は話題の four boys の属性を述べていると捉えられる。すなわち four boys は節中のトピック（clause-internal topic）として機能する。⁴ この心的接触の流れにより three girls は four boy のドミニオンの中に入るため、four boys が three girls より広いスコープを持つ表面解釈が得られる。すなわちそのプロセスは、主語（トラジェクター）→ 高い際立ち → 参照点 → 広い作用域となる。このとき参照点 four boys は specific な（限定された）人物として解釈を受ける。なぜなら、参照点はターゲットにアクセスする「手がかり」として機能しているからである。「手がかり」になりうるものは際立ちが高くかつ限定された事物である。不定の事物では「手がかり」になりえない。conceptualizer（概念主体）がある事物を参照点として意識することは、その事物を specific な（限定された）事物と捉えることができるからである。すなわち four boys は「（話題にしていた）その4人の少年」、あるいは「ここに4人の少年がいる。その少年達は・・・」とこれから話題に取り上げる specific な（限定された）4人の少年と解釈される（以下「限定解釈」という）。このように参照点となる数量詞は必ず限定解釈を受ける。一方、three girls は限定化されず、この girls は単に少女というタイプとして捉えられる。すなわち少女が3人であれば誰でもよいと解釈される（以下「不定解釈」という）。three girls についても限定解釈することができるが、その場合は多義性が生

⁴ van Hoek は次のように述べている。Reference points are, intuitively speaking, local topics — elements which the conceptualizer (the speaker or addressee) uses to contextualize other elements.....Reference points are elements which are prominent within the discourse and so serve to set up the contexts within which the conceptualizer makes contact with other entities. (van Hoek 1995: 313)

しない。この結果 four > three の解釈 *There were four boys each of whom dated three (possibly different) girls in a week* が得られる。

それではどのような場合に目的語の数量詞 *three girls* が主語 *four boys* より広い作用域を取る（反転解釈）ののだろうか。文法関係ヒエラルキーから見れば目的語はランドマークでありトラジェクターである主語より際立ちが低い。したがって主語は通常はデフォルトで参照点となることができる。それにもかかわらず目的語の際立ちが主語に勝り、際立ちの逆転が起きる理由は何か。その最大の要因はコンテキストの存在である。例えば、目的語 *three girls* が話題にしていた 3 人の少女であり、その少女達に焦点が当たっていると目的語 *three girls* の際立ちが主語の *four boys* より高くなって *three girls* が参照点として機能する (Kuno and Takami QSES (e) More D-linked Q > Less D-linked Q)。また *three girls* に関してこのようなコンテキストが与えられていない場合でも、*three girls* を誰でもよい不定の 3 人の少女（単に type-specific な存在）と解釈するのではなく、「ここにある 3 人の少女がいて、その少女を問題にすると・・・」というように *three girls* に注目し、その立場に立つ状況を想定すると、*three girls* に焦点が当たり際立ちが向上する。これは共感度階層（自分から見て共感を持つ対象の順番）において *three girls* を *four boys* より身近な存在と捉えることから生じる際立ちの逆転である (Kuno and Takami の QSES のファクターには直接該当するものがないが、(c) Human Q > Nonhuman Q、(d) Speaker/Hearer Q > Third-Person Q は共感度階層の一例である)。また 3 章で述べたように目的語に *each* が使用されるとしばしば主語の際立ちを上回る。Langacker (1991: 132) は主語の数量詞は最も際立ちが高いが、それ以外に際立ちが主語を上回る例として “heavy stress” や “new information” をあげている。目的語の際立ちを主語より高めるこれらの要因をまとめて「コンテキスト等」と呼ぶことにする。このように、*three girls* が参照点になるとターゲットである節の命題は参照点 *three girls* のドミニオン（知識領域）の中で解釈される。節の命題が参照点 *three girls* のドミニオンの中で解釈されるということは、話題はこの *three girls* に関するものであることを意味する。すなわち *three girls* は節の中のトピックとして機能し *As for three girls, four boys dated them in a week* と解釈される。参照点である *three girls* は *four boys* をそのドミニオンに入れるため、*three girls* が *four boys* より広いスコープを持つ反転解釈が得られる。このとき *three girls* はターゲットにいたる「手がかり」であるから限定解釈を受け、*four boys* は不定解釈される（この *boys* は単に少年と言うタイプとして捉えられる。少年が 4 人であれば誰でもよい。なお *four boy* も限定解釈されると多義性は生じない）。すなわちそのプロセスは、目的語（コンテキスト等）→ 高い際立ち → 参照点 → 広い作用域となる。この結果、*three > four* の解釈 *There were three girls each of whom four (possibly different) boys dated in a week* が得られる。なお初めは反転解釈 *three girls > four boys* を思いつかなかった人でも、その後しばしばこのように目的語が広い解釈をとる例に接すれば、コンテキストが与えられていなくても反転解釈の選択は容易になるであろう。これは一種の慣用化と言える。

数量詞の specificity（限定性）の判定手段に関しては、Haspelmath, Martin (1997) が述べているようにいくつかのテストがある。例えば (1) specific NP のみ discourse referent が得られる

(anaphoric pronoun で受けることができる)。(2) specific NP のみ existential sentence (存在文) に言い換えが可能である。(3) specific NP は話者によりその存在が前提されていなければならない等である。上記例文の表面解釈においては、いずれもこれらのテストをクリアしている。(1) に関しては Four boys dated three girls in a week. They are our high school football team players. と代名詞 they で受けることができる。(2) については There were four boys each of whom dated three girls in a week. と存在文に言い換え可能。(3) についても、four boys が、「話題にしていたその4人の少年」、あるいは「ここに4人の少年がいる。その少年達は・・・」と限定解釈できるのは話者が specific な少年の存在を前提にしているからである。他に有力な判定手段としては Fauconnier (1985, 1987) によるメンタル・スペース理論がある。この理論によると、言語は現実世界を直接表現する手段ではなく、認知レベルにメンタル・コンストラクションを作り出す指令であるとする。例えば three girls の specificity に関して言えば、quantifier である four boys がスペースビルダーとしてメンタルスペース quantifier space Q を設定する。three girls がこの quantifier space Q に設定されると、non-specific (four boys > three girls) の解釈が得られる。また three girls が origin space (話者の現実スペース) R に設定されると specific (three girls > four boys) の解釈が得られる。従来、意味や論理のレベルにおける構造的曖昧性と分析されてきたものが、メンタル・スペース理論では当該数量詞がどちらのスペース (R か Q) に設定されるかという配置の問題として捉える点が特徴である。以上のように数量詞の specificity の判定手段については各種の主張があり、それぞれに特徴がある。本論文の目的はこれらの比較・分析ではないので、これ以上立ち入らないが、これらの判定手段にくらべ参照点構造に基づく分析は、参照点になる事物はターゲットに至る手がかりであり、手がかりとなりえるものは specific でなければならないということから、参照点となる数量詞は specific であるとの結論をストレートに得ることができる。その意味で数ある specificity 判定方法の中で最も簡明であると言えよう。

例文 (1) Someone loves everyone. においてもプロセスは同様である。主語はトラジェクターとして節の中で最も際立ちが高い文法関係参与者であるため、他に特別な要因がない限り someone はデフォルトで参照点となる。この表面解釈において someone は話題にした「その人物」、あるいは「ここにある人物がいる。その人について語ると・・・」と限定された人物として捉えられる。someone が specific であることは someone の名前まで特定できなくてもよい。たとえば Someone in my class loves everyone in your class という例で言えば、話者がこの someone が誰であるか知らなくても、さまざまな状況証拠から誰かがいると考えれば specific である。これは上で述べた specificity のテストからも証明できる。この発話に続いて So someone in my class loves everyone in your class, but we don't know who it is. と続けることができる。すなわち、someone を anaphoric pronoun 'it' で受けることができ、上で述べた specificity のテスト (1) specific NP のみ discourse referent が得られる (anaphoric pronoun で受けることができる) をクリアできる。一方、everyone は限定化されず、不定解釈される。everyone の不定解釈とは分散解釈を要求する everyone の語彙特性から、個々の構成員が不定解釈されることを意味する。すなわち someone が愛する対象人物は限定されず、単に everyone の構成員でさえあれば誰でもよい。こ

の結果 someone > everyone の解釈 There is someone who loves everyone が得られる。

次に目的語の数量詞 everyone が広い作用域をとるケース（反転解釈）を取り上げる。文法関係ヒエラルキーから見れば目的語はランドマークでありトラジェクターである主語より際立ちが低い、次のようなコンテキストがあると目的語 everyone の際立ちが主語の someone より高くなり、everyone が参照点として機能する。たとえば事前に以下のような会話があったとする。

A: “Nobody cares about me. I’m completely alone.”

B: “You’re wrong. Someone is looking out for you. You just don’t realize it. There’s not a single person whom nobody loves.”

（この会話の後に）

B: “Someone loves everyone.”

このようなコンテキストがあると、愛される側である everyone の立場に立つ状況を想定することができる。すなわち共感度階層において everyone を someone より身近な存在と捉えることから生じる際立ちの逆転が起きる。その結果 everyone に焦点が当たり、everyone の際立ちが someone より高くなって参照点となる。このとき everyone は限定解釈を受ける。すなわち everyone の各構成員は構成員であれば誰でもよいと一律に扱われるのではなく、構成員を個々・順次的に取り上げて、それぞれの立場から相手 someone との関係を捉えることになる。a さんの場合には X さんが・・・、b については Y さんが・・・、c の場合は・・・（自分にも誰かが）というように everyone の個々の構成員ごとに文の命題を捉える構図ができあがる。すなわち everyone は specific な存在と捉えられる。またこのようなコンテキストが与えられなくても、everyone の構成員を不定な人物（構成員でさえあれば誰でも同じ）と見るのではなく、個々のメンバーの独自性が問題になっていると考え、everyone の個々の構成員の立場に寄り添う状況を想定すると共感度階層において everyone が someone より上位となり、everyone の際立ちが高くなる。事実 everyone > someone の解釈は、本文に挙げたようなコンテキストが事前に与えられていなくても可能な人が多い。⁵ その結果、everyone > someone の解釈 (For everyone, there is someone who loves him/her.) が得られる。このとき someone は限定された人物ではなく everyone の構成員の一人ひとりについての 単なる相手である「不定の誰か」にすぎない。

⁵ 上記の英文に相当する日本文「誰かが誰もを愛している」の解釈については、「誰か」>「誰も」の解釈しか得られないとする人が多い。しかしこの発話も次のようなコンテキストがあれば、「誰も」>「誰か」の解釈が可能と筆者は考える。

A: 「みんな俺のことなんかどうでもいいのだ。俺はこの世で一番孤独だ」

B: 「そんなことはない。誰かが君を心配しているのに気付かないだけなのだ。誰からも愛されていない人間なんてこの世にはいないよ。」

このように目的語「誰も」の立場に立つ状況が想定されたあとに、「誰かが誰もを愛している」と B が続けると「誰も」>「誰か」の解釈が可能となる人も多いのではないだろうか。コンテキストがないと、「誰も」>「誰か」の解釈ができない人が日本語話者に多いことは興味深いテーマである。おそらく日本語には「かきませ」があり、「誰も」>「誰か」の意味では「誰もを誰かが愛している」という言い回しを使うことが慣用化していることなどが関係していると思われる。

someone がたまたま同一人 (=限定された人物) を指す場合は、表面解釈と同じ結果となり多義性が生じない。

数量詞の多義性はこの限定、不定の転換から捉えることができる。例文 (9) Four boys dated three girls in a week においてこの関係を図示すると次のようになる。

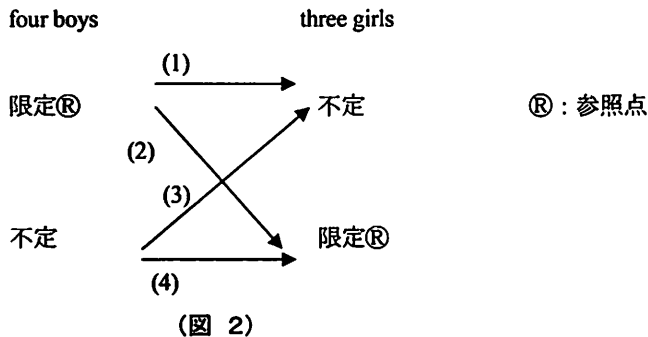


図2において four boys > three girls の解釈は (1)、three girls > four boys は (4) である。限定、不定の組み合わせには理論上他に (2)、(3) が存在するが、(2) においては、four boys ならびに three girls が共に限定化されており多義性は生じない。(3) は“不定な4人の少年が不定な3人の少女を愛している”ということになり、メッセージとして意味をなさない。またこの関係は主語と目的語が数量詞の組み合わせではなく、一方が定名詞で初めから限定されている場合も同様に説明できる。たとえば次のような文章は多義性が生じない。

(10) John loves every girl.

この場合 John が参照点となり every が不定となる表面解釈「John はどの少女も愛している」(上図の (1)) と、every が参照点となり限定化される(構成員ごとに相手を見る)反転解釈(上図の (2)) が得られるが、反転解釈の場合、それぞれの相手はすべて特定の John ということになるため、その解釈は表面解釈と変わらない。したがってこの文は一つの解釈しか得られず、多義性が生じないことになる(every girl が参照点となる反転解釈が存在しないということではない。反転解釈は存在するが、結果的に表面解釈と同一となると言う意味である)。

数量詞と述語の間の作用域の多義性についても、参照点構造によって説明することができる。たとえば次の例文は多義性がある。

(11) An American runner seems to Bill to have won a gold medal. (Fox 2000: 46)

例えばコンテキスト等があって Bill がある特定の American runner を応援していることが分かっている場合、あるいは Bill の喜ぶ様子を見てそのことが想像できる場合などでは、an American runner は際立ちが高いため参照点となってそのドミニオン(an American runner に関する知識領域— Bill が応援している人物であること)の中で節の命題(ターゲット)が解釈される。節の命題が an American runner のドミニオンの中で解釈されるということは、命題はこの an American runner に関するものであることを意味し(すなわち an American runner は節の中

のトピックと理解され)、その結果 Bill has some American runner in mind, it seems to Bill that that particular American runner won a gold medal. (Bill には応援している American runner (限定) がいて、その選手が金メダルを取ったように思われた) という解釈が得られる (an American runner > seems)。一方、Bill が特に心に描く選手がいない場合で、周りの米国人が喜ぶ様子を見て Bill が米国選手の誰かが金メダルを取ったと察したような場合には、an American runner は際立ちが高くないため参照点にはならず (すなわちトピックにはならず)、It seems to Bill that some American runner or other won a gold medal. (Bill には誰か American runner (不定) が金メダルを取ったように思われた) という解釈が得られる (seems > an American runner)。

もう 1 例挙げる。

(12) John wants to marry a Japanese girl.

コンテキスト等があって、John が特定の日本人女性と結婚したいと望んでいることが分かっている場合は、a Japanese girl は際立ちが高いため参照点となってそのドミニオン (その日本人女性は John が結婚したいと望んでいる女性であること) の中で節の命題 (ターゲット) が解釈される。節の命題が a Japanese girl のドミニオンの中で解釈されるということは、話題はこの a Japanese girl に関するものであることを意味し (a Japanese girl が節の中のトピックと解釈されて)、「John には意中の日本人の女性 (限定) がいて、彼はその人と結婚したいと望んでいる」という解釈となる (a Japanese girl > want)。これに対し John が単に日本人女性と結婚したいと望んでいるだけで特定の人物がいない場合は、a Japanese girl は際立ちが高くないため参照点とはならず (したがってトピックにはならず)、「John は誰か日本人の女性 (不定) と結婚したいと望んでいる」という解釈が得られる (want > a Japanese girl)。なお当然のことながら次の例文には多義性が生じない。

(13) John wants to marry a certain Japanese girl.

この文においては a certain Japanese girl が初めから限定化されており、a certain Japanese girl > want しか存在しない。したがって多義性が生じない。

また、Antecedent-Contained Deletion については QR を用いて次のような説明がされているが参照点構造によって説明することができる。

(14) John kissed everyone that Sally did [_{VP} e]. (Hornstein, Norbert 1994)

において、empty VP にコピーできる VP は kissed everyone that Sally did [_{VP} e] であるが、これを単純にコピーして挿入すると kissed everyone that Sally did [kissed everyone that Sally did [_{VP} e]] となり、いわゆる regress problem (遡及問題) を生じてしまう。これに対し everyone that Sally did [_{VP} e] に QR が適用されたと考えると LF で TP に付加されて、[_{TP} [everyone [that [Sally did [_{VP} e]]]]_i [_{TP} John kissed t_i]] という構造ができる。この empty VP に kissed t_i をコピーして挿入すると、[_{TP} [everyone [that [Sally did [_{VP} kissed t_i]]]]_i [_{TP} John kissed t_i]] となり、regress problem が解消される。この問題は参照点構造を使っても説明することができる。John kissed everyone that Sally did [_{VP} e] においては、主語である John の際立ちが高く参照点となる解釈 (表面解釈) と、everyone の際立ちが勝って参照点となる解釈 (反転解釈) が生じる。everyone that Sally did

[_{VP} e] が参照点となると、節の命題（ターゲット）はこの参照点のドミニオンの中で解釈される。この心的アクセスにより、参照点 *everyone that Sally did* [_{VP} e] はトピック (clause-internal topic) と捉えられ、主語を含む残余のフレーズ *John kissed* はトピックの属性を表わす部分と解釈される。すなわち命題が *as for everyone that Sally did* [_{VP} e] と *John kissed him/her* の二つの概念に分かれる。この場合、削除された動詞 *did* [_{VP} e] は属性部分の *John kissed* から *kissed* がコピーされ *did* [_{VP} kissed] となる。その結果 regress problem を回避することができる。一方表面解釈の場合、トピック部分は *John* であり、属性部分は *kissed everyone that Sally did* [_{VP} e] となる。この概念分離では *did* [_{VP} e] は *kissed everyone that Sally did* [_{VP} e] がコピーされ *did* [_{VP} kissed everyone that Sally did [_{VP} e]] となるので regress problem が生じ解釈不能となる。したがって例文 (15) は *everyone > John* の解釈しか得られないが、この反転解釈の存在により遡及問題が解消される。*everyone > John* の解釈は図 2 の (2) と同様に、*John > everyone* の解釈と結果的に同一となるので、スコープの面からは *everyone > John* の解釈しか得られないことは分かりにくい。しかしこの文の *John* を数量詞に置き換えた *Someone kissed everyone that Sally did.* においては *everyone > someone* の解釈しか得られないので (unambiguous)、スコープの解釈からも *everyone that Sally did* が参照点となっていることが分かる。反転解釈しか得られない理由は *everyone that Sally did* [_{VP} e] が参照点になれば regress problem を回避できるが、*someone* が参照点になると regress problem が生じてしまい解釈不能になるからと考えれば説明ができる。

以上述べてきたことは次のようにまとめることができる。文中に複数の数量詞がある場合、際立ちが高い方の数量詞が参照点となる。主語の数量詞はトラジェクターとして最も際立ちが高いためデフォルトで参照点となることができ表面解釈が得られる。しかし目的語の数量詞がコンテキスト等の存在によって主語の数量詞より際立ちが高くなると、目的語の数量詞が参照点となり反転解釈が得られる。目的語の数量詞の際立ちを高める要因の最大のものはコンテキストの存在であるが、その他にも共感度階層など各種存在する。参照点となる数量詞は節の中のトピック (clause-internal topic) として機能する。またこの数量詞は必ず限定解釈を受ける。なぜなら、参照点はターゲットにいたる「手がかり」だからである。「手がかり」になりうるものは際立ちが高くかつ限定された事物である。複数の数量詞が存在する文で多義性が生じるのは、このようにどちらの数量詞でも参照点になる可能性があるからと考えられる。ただし、常にどちらの数量詞でも参照点になれるわけではない。多義性が生じないケースがあることを 6 章で論じる。

5. 参照点の決まり方：代名詞の照応関係との違い

これまで、参照点の決定は文法関係ヒエラルキーにおいて優位にあることが第一の要因であるが、文法関係が劣位の数量詞のコンテキスト等による際立ちの向上が第二の要因であって、この第二の要因の存在が数量詞の多義性に関係していることを見てきた。しかし、van Hoek の参照点構造による代名詞の照応関係の説明を見ると、参照点の決定のされ方に数量詞の場合と違いがみられる。次にその理由について考えてみたい。van Hoek は代名詞の照応関係における

参照点の決定のされ方について、参照点は基本的に complement chain (補部連鎖) によって決定されると主張している。complement chain とは文中の動詞の補部 (項を指す。したがって主語も含む) の間の際立ちの差をいう。主語は一番際立ちが高いため、他の補部に対して参照点となる。直接目的語は二番目に際立ちが高いため、主語を除く他の補部に対して参照点となる。すなわち、文法関係のヒエラルキー (Subject > Direct Object > Oblique (Keenan & Comrie 1977)) に従う。また、補部はプロファイルされているので参照点になれるが、修飾句の中の要素はプロファイルされないため、基本的に参照点になることができない。この主張によれば文法関係で劣位にある要素は参照点になることができない。しかし、数量詞の多義性の場合には文法関係で劣位にある数量詞でもコンテキスト等があれば参照点になることを見てきた。代名詞の照応関係では文法関係で劣位にある数量詞はなぜ参照点になれないのだろうか。いくつかの例文をベースに、数量詞の多義性と代名詞の照応関係における参照点の決定の仕方の違いを分析し検討する。まず主語と修飾句に数量詞が使われている例文を検討する。

(15) Someone voted against Junta in every city. (著者の作例)

この文では every > someone の解釈「すべての都市で誰かが軍事政権に反対投票をした」が得られる。これは修飾句の中の every がコンテキスト等の存在により、主語 someone を差し置いて参照点となっていることを示している。van Hoek の主張によれば、通常プロファイルされ、際立ちが高いのは主語、目的語、oblique などの項で、この中から参照点を選ばれるが、この文例はさらに際立ちが低い修飾句の中の要素も参照点になれることを示している。一方、van Hoek (1995 (9a), (20b), (20c)) は次の例文を挙げ、修飾語や修飾句内の要素は参照点にはなれないと主張している。(下線は同一指示を示す)

(16) a *He likes John's mother.

b *He holds wild parties in John's apartment.

c *In John's apartment, he holds wild parties.

例文 (16a) が非文となる理由を van Hoek は次のように説明している。主語は際立ちが高いため参照点となり目的語 John's mother をそのドミニオンに入れる。主語に代名詞が使われているので、会話当事者間では誰を指しているかが分かるにもかかわらず、その代名詞のドミニオンの中にある同一指示の対象に low accessibility marker である John というフルネームが使われている。このため奇異な感じを与えて非文となる。例文 (16b)、(16c) では process-internal modifier である in John's apartment は主語のドミニオンの中で解釈される。⁶ 主文の主語に代名詞が使われていて対話者には誰を指しているか明白であるにもかかわらず、その代名詞のドミニオンに入っている同一指示の対象に low accessibility marker である John というフルネームが使われ

⁶ van Hoek によれば process-internal modifier とはプロセス概念の中の一部を表すが、補部のように概念の中のプロファイルされた部分ではなく、道具、着点、起点などを表す修飾句、空間・時間の状況を表す修飾句、動作主の心理状態を表す修飾句などとしている。この process-internal modifier の概念について Takami (1999) は「およそ VP-modifier に相当する」と指摘している。

ている。このため奇異な感じを与えて非文となる。また van Hoek (2007) では A pronoun must appear in the dominion of a corresponding reference point. (代名詞は参照点となっている先行詞のドミニオンの中に入っていないなければならない) と述べている。したがって上記例文 (16) が非文となる理由は代名詞 he が名詞 John のドミニオンに入っていないためということになる。つまり修飾句の中の要素は参照点になれないとの主張である。修飾句の中の要素が参照点になれるか否かについて、このように数量詞のスコープと代名詞の照応関係では異なるように見える。この理由は何であろうか。代名詞の照応関係の例文 (17) と、その名詞、代名詞を数量詞に置き換えた例文 (18) の比較により検討してみたい。

(17) *He held wild parties in John's apartment.

(18) Someone held wild parties in everyone's apartment. [ambiguous]

(17) が非文となる理由は上記の van Hoek の説明の通りである。つまり process-internal modifier 中の要素は参照点になれないとの主張である。しかし (18) の文例は everyone > someone 「どの人のアパートでも誰かがワイルド・パーティーを開いた」の解釈が得られ、コンテキスト等によって everyone が参照点になることを示している (筆者のインフォーマントは 2 名とも ambiguous であると指摘している。ただし someone > everyone, everyone > someone のうちどちらの解釈が強い点については意見が分かれた)。なぜ数量詞の多義性の例では修飾句の中の要素が参照点になることができ、代名詞の同一指示の例ではなれないのだろうか。この数量詞の多義性と代名詞の同一指示の違いは次のように考えられる。第一点は参照点となるための条件の違いである。参照点構造においては際立ちの高い要素が参照点となる。代名詞の照応関係の場合も同様であるが、さらにもう一つ条件がある。名詞とその代わりとして使われる代名詞の間には参照点構造において一方的なアクセスの順番が存在する。John と he が同一人物である場合、John の代わりに he というのであって、その逆ではないから参照点構造でもアクセスは John → he の方向であることが必要である。すなわち、John を手がかりとしてターゲットである he に到達するのである。名詞 John の方が参照点となり、代名詞 he をそのドミニオンに入れるという方向性が要求される。van Hoek (2007) が A pronoun must appear in the dominion of a corresponding reference point. と主張しているのはこの理由による。そのためには、名詞の際立ちが代名詞より強くなければならない。この条件は代名詞の特性から生じる制約と言える。一方、数量詞の多義性においては、どちらの数量詞でも際立ちが高い方が参照点になり、そこから相手にアクセスすることができる。例文 (18) Someone held wild parties in everyone's apartment. においては、どちらかが必ず参照点にならなければならないという制約はない。したがって everyone が参照点となってもよく、その場合 someone は everyone の構成員ごとに不定の人物を想定すればよい。第二点は際立ちの高さに影響を与える要因の違いである。例文 (17) *He held wild parties in John's apartment. の例では、主語の he が参照点になる解釈が得られるものの、アクセスが he から John では上記の理由から同一指示は成り立たない。それでは、John が参照点になることができるであろうか。もしこれができれば名詞から代名詞へというアクセス上も問題がなく同一指示が可能となる。例文 (18) の数量詞の多義性のケースは everyone

がコンテキスト等の存在により際立ちが someone より高くなって参照点になることができる。しかし代名詞の同一指示の場合は John と he は同一人物である。同じ人物を意味する二者の片方だけに作用するコンテキスト等は存在しない。二者が別の事物である例文 (18) と異なり例文 (17) ではコンテキスト等によって主文の主語である he より John の際立ちを高めることができないのである。すなわち、John の際立ちが勝るには、このような意味上の違いではなく、文法関係ヒエラルキーの優位性を得る以外にはない。これも代名詞の特性から生じる制約と言える。代名詞の照応関係において際立ちの高さを決定する要因として van Hoek は complement chain (補部連鎖) と linear order (線形順序: 順序が先であること) のほかに次のようなトピック構文化をあげて、“topicalizing a nominal makes it a reference point in relation to the entire clause...” と主張している。

(19) *Him, John's wife can't stand. (van Hoek 1997 (10)) トピックである代名詞が参照点となり、そのドミニオンに名詞が入っているため非文。

このように、代名詞の照応関係において際立ちの高さを決定する要因は補部連鎖、線形順序、トピック構文といずれも統語的要因であることが特徴である。Kuno and Takami (2002) の QSES の分類でも、他の要因 (c) Human > Nonhuman, (d) Speaker / Hearer > Third Person, (e) More D-linked > Less D-linked, (f) More Active Participant > Less Active Participant, (g) More Specific Q > Less Specific Q, (h) Each > Other Quantified Expressions などは、二者 (John と he) が同一という前提なのですべて該当しない。つまり二者が同一の事物を指す場合、際立ちの高さに影響を与えるのは統語的要因であることが分かる。⁷ さらに Direct Object と Oblique に数量詞が使われているケースを見てみよう。Kuno and Takami (2002) の例文 (2) を再度取り上げる。

(20) a. I introduced everyone to some guests. [ambiguous]

b. I introduced some guests to everyone. [ambiguous]

上記の文例では、文法関係のヒエラルキー (Direct Object > Oblique) にもかかわらず、Oblique が参照点となる解釈、すなわち (20a) では「私は皆を何人かのゲスト (限定) に紹介した」(some

⁷ しかし代名詞の照応関係の場合でも次のように統語的要因以外の要因が際立ちに影響を与えるケースがある。Takami (1999: 231) では backward anaphora が可能となる要因として causality (因果関係) を挙げ、van Hoek が process-internal modifier 内の要素は参照点になれないため不適格として扱っている下記例文 (1a), (2a) も (1b), (2b) のように原因が明確であれば適格になると指摘している。

(1) a. *She's intolerable when Mary talks about linguistics.

b. She's intolerable when Mary goes into hysterics.

(2) a. *He studied very hard before John got married.

b. He trained very hard before John finally got into the Olympic team.

この指摘は process-internal modifier は主文主語のドミニオンに入るという van Hoek の主張に対する反論である。しかし、代名詞の照応関係の場合、片方だけにコンテキスト等を作用させることはできないが、この例はそれと異なり修飾句の高い際立ちがその中の名詞に反映し名詞の際立ちを高め、その結果名詞が参照点となったと考えることができる。したがって代名詞の照応関係において、名詞の際立ちに影響を与える新たな意味上の要因を提示したものであって、参照点構造による代名詞の照応関係の説明自体に対する反証ではないと考えられる。

> every)、(20b) では「それぞれ皆に何人かのゲスト (不定) を紹介した」(every > some) が可能である。すなわち Direct Object と Oblique の組み合わせでも、文法関係で際立ちが弱い方の Oblique が参照点となれることを証明している。一方、代名詞の照応関係ではどうであろうか。

(21) a. I will introduce Mary's new teacher to her. (Takami 1999 (41))

b. *I will introduce her new teacher to Mary.

(21a) は direct object > oblique のヒエラルキーにより際立ちが高い Mary が参照点となり適格文となるが、(21b) は同じ理由で代名詞 her が参照点となり非文となる。これは、everyone と some guests が異なる人物を指す数量詞の場合と違い、Mary と her は同一人物なので Mary だけがコンテキスト等の働きにより際立ちが高くなることができないからである。したがってこの場合も、数量詞の多義性では文法関係が劣位の要素でもコンテキスト等の作用により参照点になることができるが、代名詞の照応関係ではそれを許さないことが見て取れる。目的語と修飾句の中に数量詞が使われる場合はどうであろうか。

(22) Sally gave Sam a present for every birthday. (著者の作例)

この文は多義性があり次の二通りの解釈ができる。

a > every 「Sally は Sam にあるきまった (限定) プレゼントを毎年誕生日にあげた」

every > a 「Sally は Sam に毎年誕生日に何かしら (不定) のプレゼントをあげた」

every > a は毎年の誕生日の個性性が強調されるケースである。この場合は修飾句の中の every が参照点になりえる。ちなみに著者のインフォーマントは二人とも、本文例は多義性があり、しかも every > a の解釈の方が強いとの意見であった。一方、代名詞の照応関係に関して van Hoek (1995 (25)) は次の説明をしている。

(23) a. Sally gave Sam a hamster for his birthday.

b. *Sally gave him a hamster for Sam's birthday.

(23a) では Sam が his の参照点となっており同一指示が可能であるが、目的語の位置に代名詞が使われている (23b) では同一指示が出来ない。目的語は主語以外のすべての補部に対して参照点となる (van Hoek 1995: 321) との理由からである。数量詞の場合例文 (22) で見るように、every は参照点になりうる。ここでも代名詞の同一指示と数量詞とでは際立ちに影響を与える要因の違いが見て取れる。その理由は、数量詞の場合と異なり代名詞の同一指示では名詞と代名詞の指す対象は同一であるため、片方だけがコンテキスト等の影響を受け際立ちが高くなることができないからと考えられる。

6. 多義性が生じないケース

先に見たように Kuno and Takami (2002) は多義性が生じないケースとして、得られた解釈がプラクティカルに見てあり得ないものであればその解釈は消えると主張して、(5) An oak grew from every acorn. の例をあげている。しかしこのケースは双方の数量詞とも参照点となることができ2つの解釈が生じるが、そのうちの一つがプラクティカルな理由で消滅するもので、最初から参照点になれないわけではない。これに対して一方の数量詞の際立ちが非常に強く、参

照点が最初から一方に限定されるケースでは当初から多義性が生じない。その一つは構文の働きによるもので、例えば *Many of these books, all of us have read with great enthusiasm.* のようなトピック構文では、トピックとなっている *Many of these books* が強調されて際立ちが圧倒的に高く、これを参照点にして文の命題(ターゲット)が解釈される。すなわち *all of us* は *Many of these books* のドミニオンに入る。また次のような二重目的語構文も同じ理由で多義性が生じない。

(24) *John assigned one student every problem.* [unambiguous] (Kuno and Takami 2002 (78a))

文法関係のヒエラルキーでは直接目的語 (*every problem*) > 間接目的語 (*one student*) であるが、二重目的語構文では間接目的語が直接目的語を所有するという二重目的語構文の構文的意味から、*recipient / beneficiary* である *one student* の際立ちが非常に高く、文法関係のヒエラルキーに勝る。このため所有者である間接目的語が参照点となると考えられる。このため直接目的語である *every problem* が参照点となる解釈を許さず多義性が生じない。同様のケースは代名詞の同一指示に関しても存在する。van Hoek (1997 (14)) では次の例文を示し、文法関係のヒエラルキーに関わらず、*recipient or beneficiary* が *primary landmark* として参照点となると指摘している。

(25) a. I gave Sam his book.

b. *I gave him Sam's book.

以上のように二重目的語構文においては *recipient / beneficiary* である間接目的語の際立ちが非常に高くコンテキスト等の影響が働かず多義性が生じない。二番目は *point of view* (観点) が働くケースである。van Hoek は *point of view* とは *conceptualizer* (概念主体) がそれを通じて対象となる概念を解釈するので、参照点であると主張して次の例文 (van Hoek 1995 (24)) を示している。

(26) a. Mary told John that he should find a better job.

b. *Mary told him that John should find a better job.

tell のような動詞の目的語は従属節の中の要素に対して *cognizer* あるいは *viewer* と解釈されるため心的アクセスの流れは目的語から従属節に向かい、その逆が存在しない。そのため (26a) では同一指示が可能であるが (26b) は非文となる。これと同じように数量詞の参照点も *point of view* の働きで心的アクセスの方向が一方に制限されると多義性がなくなり、同様の事実が指摘できる。

(27) *Mary told someone that everyone should find a better job.*

この文は例文 (26) における名詞、代名詞を数量詞に置き換えたものだが、*someone* > *everyone* の解釈しか得られない。上記の理由で心的アクセスの流れが *someone* から *everyone* へ向かう方向しか存在しないためである。数量詞の多義性はどちらの数量詞でも参照点になることができるため生じる。この場合どちらの参照点からでも相手の数量詞へアクセスできることを前提としている。したがって上記のケースのように初めから一方からの心的アクセスしか許さない場合は当然の結果として多義性は生じない。

7. まとめ

数量詞が複数含まれている文では多義性が生じる。これは生成文法では一般に QR と c 統御で説明されるが、参照点構造により説明することができることを述べた。また van Hoek は代名詞の照応関係を参照点構造によって説明しているが、参照点となる理由が数量詞のケースと異なる。しかしそれは参照点構造の矛盾ではなく、代名詞の特性から生じる制約であることを示した。参照点構造による数量詞の多義性や代名詞の照応関係の説明で問題となることは、際立ちの高さに影響を与える各種の要因の整理と分析である。際立ちが高い数量詞が参照点になることは明らかであるが、際立ちに影響を与える要因は様々であるから、これをいかに整理・分析するかという点が重要である。Kuno and Takami (2002) の QSES は際立ちの高さに与える各種の要因を数多く示しており有益な分析であるが、各要因の強さを同等と見なしている点に問題がある。指摘したようにその強さは決して同一ではない。本論文では際立ちの高さに影響を与える要因を 2 つのグループに整理した。1 つは文法関係のヒエラルキー (Langacker 1991 のトラジェクター、ランドマーク、van Hoek 1995, 1997 における complement chain、Kuno and Takami 2002 では QSES (a) Subject Q > Object Q > Oblique Q) である。主語は圧倒的に際立ちが高く他に特別な要因がない限りデフォルトで参照点となる。2 つ目は文法関係ヒエラルキーが劣位であっても、際立ちの逆転を許すコンテキスト等の存在である。この 2 つの要因による際立ちの高さの交替、図地反転が多義性が生じる理由である。生成文法における統語構造に基づくスコープの分析は曖昧性を排除して明解であり、また数量詞の多義性だけでなく否定の解釈など他のスコープに関しても一元的に説明できるメリットがある。一方、どちらの数量詞がどのような理由で相手より高い位置に上昇するのか、あるいは上昇し易いのか（その解釈の方が強いのか）といった点については、統語的理由だけでは説明しきれないように思われる。認知文法上のアプローチである参照点構造による説明は、これを際立ちの差で説明することができる。また参照点はトピックとして機能すること、参照点は限定化されるという事実をストレートに説明できるメリットがある。複雑な言語現象を一つの理論によってすべて説明することは困難と考えれば、生成文法、認知言語学の双方からアプローチすることは相互補完の観点から意義があると思われる。

参考文献

- Fauconnier, Gilles (1988) Quantification, roles and domains. In: Umberto Eco et al. (eds.) *Meaning and Mental Representation*, 61-80. Bloomington: Indiana University Press.
- Fox, Danny (2000) *Economy and Semantic Interpretation*. London: The MIT Press.
- Haspelmath, Martin (1997) *Indefinite Pronouns*. Oxford: Clarendon press.
- Hornstein, Norbert (1994) An argument for minimalism: the case of antecedent-contained deletion. *Linguistic Inquiry* 25: 455-480.
- Keenan, Edward L. and Bernard Comrie (1977) Noun phrase accessibility and universal grammar. *Linguistic Inquiry* 8: 63-99.
- Kuno, Susumu (1987) *Functional syntax: Anaphora, discourse and empathy*. Chicago: The University of Chicago Press.
- Kuno, Susumu (1991) Remarks on quantifier scope. In: Heizo Nakajima (ed.) *Current English linguistics in Japan*, 261-287. Berlin: Mouton de Gruyter.
- Kuno, Susumu and Takami, Ken-ichi (2002) *Quantifier Scope*. Tokyo: Kuroshio Publishers.
- Langacker, Ronald (1991) *Foundations of Cognitive Grammar Volume II: Descriptive Application*. Stanford: Stanford University Press.
- Langacker, Ronald (1993) Reference-point constructions. *Cognitive Linguistics* 4(1): 1-38.
- Langacker, Ronald (2008) *Cognitive Grammar*. Oxford: Oxford University Press.
- Takami, Ken-ichi (1999) Anaphora: Cognitive Grammar Account vs. Generative Grammar Account. *English Linguistics* 16(1): 210-236.
- Van Hoek, Karen (1995) Conceptual Reference Points: A Cognitive Grammar Account of Pronominal Anaphora Constraints. *Language* 71(2): 310-340.
- Van Hoek, Karen (1997) *Anaphora and Conceptual Structure*. Chicago and London: The University of Chicago Press.
- Van Hoek, Karen (2007) Pronominal Anaphora. Dirk Geeraerts and Hubert Cuyckens (eds.) *The Oxford Handbook of Cognitive Linguistics*, 890-915. New York: Oxford University Press.

Account for Quantifier Scope by Reference-point Constructions

Kinichi Nakae
nakaemar@ybb.ne.jp

Keywords: scope, reference-point constructions, prominence, context etc.,
clause-internal topic, specific, non-specific

Abstract

A sentence containing multiple quantified expressions such as “Someone loves everyone” is ambiguous between the someone > everyone interpretation and the everyone > someone interpretation. In the framework of generative grammar, the phenomenon of quantifier scope is accounted for by quantifier raising (QR) and c-command. This phenomenon can be explained by means of reference-point constructions introduced by Langacker (1991,1993). When someone is chosen as a reference point, the someone > everyone interpretation obtains. Conversely, when everyone is chosen, the everyone > someone interpretation obtains. As it is by virtue of salience that an entity is chosen as a reference point, it is necessary to clarify the characteristics of cognitive salience and how a reference point is determined. For this purpose, Chapters 2 and 3 examine Kuno and Takami (2002) which accounts for quantifier scope using a Quantifier Scope Expert System. In Chapter 4, I propose a reference-point construction analysis of quantifier scope. Karen van Hoek (1995, 1997, 2007) analyzes the constraints on pronominal anaphora in English in terms of reference-point constructions, but the conditions to be a reference point in the case of anaphora somewhat differ from the one of quantifier scope. In Chapter 5, I attempt to explain the reason of this.

(なかえ・きんいち 青山学院大学大学院)